

(傾城水滸伝)

水滸伝 十五編ノ壺 笠亭仙果編次 歌川国貞画

1855年きのとう
嘉永七年乙卯春新刻 東都両国大黒屋平吉梓

▼：改頁 ☆：未翻訳 □未校訂

大箱が背に重きちゆうそ☆を發したりければ、俄かに筑紫の戦を留め、下総八幡の女医師、丹波の安刀自を呼び寄せんと東へ遣りたる下貝は利根川の渡しにて船主に黄金を奪われ川中に投げ入れられしが、着物は重ねて身は重く、事に両手を縛られたれども水練の達人なれば、しばらくは水に潜み東の岸へ潜り行き、角ある岩に繩を擦り付けて辛くして縛めを自ら斬り捨てて這い上がるに、師走の初めの事なれば命につつが無けれども、身は冷え凍え、眼も暗み、心も消ゆるやかに覚え、絞らんとする袖は凍り、歩まんとする道は滑り、ほとんど難儀に及ぶ所へ通り掛れる酒屋の娘が見かねて伴い、我が家に帰り着物を着せ替え、焚き火にあて、粥を与え、酒を進めて父の翁と諸共に介抱なせば、下貝は氣力も調い、しばしの間に健やかになりしかば、感涙流して恩を謝し、宿とならに、この家にて遂に一夜を明かしけり。

下貝はただ近江の者の八幡辺りの縁を訪ね、道をおさぼり船を雇い、返って難に会いける由を粗々語れば主人の翁は頷いて云いけらく※、

「その盗人はこの辺りに住んで、横平太と云う溢れ者。身にも応ぜぬ口のみ聞けば贅放き(ほら吹き)※とあだ名せり。人を騙して船に乗せ、川中にて物を盗り、またの□いではひ剥ぎをなし、酒色の為に▼使い果たし、これを上無き楽しみとす。我が店へも酒飲みに来たりし事無きにもあらず、千葉殿の威勢足らねば、厳しき追捕の沙汰も無く、豊かな暮らしのものには迷惑。御身は近江の人と聞く。賊の砦の大箱は所々の女の山賊、また海賊を味方に付け、彼女らを□ろに導いて、邪険な武士は苦しめれども軽き者には目もかけず、姫君とやらんを守りたてて、忠義を尽くすところまで評判するは嘘でもあるまじ。真ならば親わしく感ずべき女なり。その女らとは事代わり、女中を川へ投げ込んで、少しのみに目をかけるは働きのない横平太。その癖世間のきつい邪魔者。大箱とやらがここに居らば直に退治されようもの、何を云うても近江と下総、叶わぬ事」とうち嘆く。

※けらく：《過去の助動詞「けり」のク語法》…であったこと。…であったことには。

下貝は微笑んで、

「今は何をか包み申さん。私はその大箱殿の腫物の療治を頼む為にわざわざ八幡へ来たる者。丹波の安刀自を迎えの使いの下貝とて、元は武蔵の生まれ、ここまで来て心緩み、船に眠って不覚の到り。三百両に近き黄金を盗られて命も捨てんとせしは面目無し」と物語れば翁は娘を指さして、「此奴も女に似気無き生まれ、負けるが嫌いの強情者。十の歳に友達と掛け暮らして、銭百文を噛み砕いて齒を損じ、子供の時より齒抜けとなり百錢婆アとあだ名を付けられ、真の名はお睦と申して、さすがに力も大男の一人や二人は軽く投げ。棒を使い、よく走り、水に入ってよく泳ぐ。とても女の出来損ない。何のお役に立たずとも、お帰りにはお連れなされくださるならば、親子の喜び日頃の念願、叶うと云うもの。お頼み申す」とうち解けて、なお様々にもてなしつつ、金さえ少し貸しければ、下貝は勢い付いて、次の日の朝ここを出て安刀自の住処に到るに、安刀自はこの里に長者と呼ぶ、油屋の修三と云えるが誘って松戸の宿の李屋へ昨日行って帰らずと云う。さら

ばとて松戸へ行くに李屋は旅籠屋なるが、彼の油屋の修三なるべしが二階にて人留女（宿客引き）を数多集めて三味線弾かせ、酒盛りの真つ最中なり。下貝は安刀自に会いたき由を云いいるらに、しばらく一間に待たせ置き、安刀自は出て来たり。

「下貝さんとは珍しや。その後とはとんと会わずに何処にいたのか御無事で何より。旅やつれの様子なるが、この寒空に何事あって私を尋ねてくだされる」といぶかれば、下貝は江鎮泊に加わりしより、この度来たりし一ケ條を細々と物語り、

「さて利根川にて不覚をとり、持参の金さえ路用さえ奪い取られて、これ無き上はこれより近江へ誘い行く路地の手当ても安刀自の厄介ならでは叶わず」と胸を定めて手強く語らい、

「さもあれ砦へ御座しなば、病の治らぬ治るによらず、千両の報いはあらん。返詞も早くお供して参りたし」と云いければ安刀自しばしは物をも云い得ず、

「真に呆れし顔色なりしが、上方の▼御方の話に大箱と云う女中は謀反人でも情け深く、義理を諦め、大勢の人が帰服し従い、実に忠義な方の由。誰あろうそなたより遙々とこころまでお迎え受けしは医者冥利。すぐさまお供申さねば無面目に似たれども、今日お供してここへ来た油屋のご主人は大恩あって、常日頃、私を傍ら離されず、秋の程より心地優れず、久しく預かる御病人。五日と七日の旅では無し、一月も二月も捨てては他国へ行き難し。是非もなや」と嘆息すれば、

「京三界に腫物一つ治す医者も無い様に、わざわざここまで先生を尋ねて参るも最前に申した通り夢の告げ。それに背かば大箱殿の命は必ず保つまじ。お都合が悪いのを強いてとも云い難けれど、酒飲んで踊り狂う御病人は畢竟、我がまま。此方のは十死一生。賊の砦の使いとはまさかには云われねども、どうとも云いなしてその方はお断りなさったら、どうか暇が取れそなもの。謀反人や盗賊を療治してはと後難を負い問ある上、土産さえ持参せねばお承知無いのは最もさりながら、口から外へこう出しては否でも応でも連れて行く」、

「さてさて無理な下貝殿。金持ちの襟に付き、名も隠れ無き御方の御所望を粗略にする安刀自なれば、人におもねりへつらって金を儲けて樂をする医者は流行れど、薬礼を受けた半分、非人に施し、金の持たれぬ私の性分、親やすみち☆の製薬の秘法を惜しみ罪を受け、この国へさすらって、あの油屋の衰れみを受け、近頃果てたる母の重病、吊いの医療や何やらかやらに油屋にて百両余りの金を借り、今にそれが返されず、今の修三と云う主人は慳貪邪険の人情知らず、その癖に色好み病と云うのも、実はかさいかほどき☆、術を尽くすとも治らぬ内に不養生、付け薬洗い薬を常々私を引き付けて置かれる辛さを推量あれ。金をも返さず身勝手に一月ないし二月の暇を乞うとて許さんや。この所をなおよくよく考えて見たまえ」と語るに偽りあるべくもあらねば、下貝は一入憂い、「三百両だに懐にあれば、借りたる金わきまえ、義理を払って伴わんに、悔しき事をしてけり」と口惜し涙におせ返れば安刀自はいとおしく、

「ならぬまでも機嫌をうかがい話してはみぬが損、ゆるゆる休んでおいで」とて二階の方へ行く後を下貝は見送って、「大行は細瑾を顧みず※」と云う事あり。

※大行は細瑾を顧みず：大事業を成し遂げようと志す者は細かい事柄にこだわらない。『史記・項羽本紀』の故事に基づく。

罪無き者を殺すのは僣び難き業なれど、慳貪邪険と聞く修を今宵の内に闇討ちし、安刀自が殺したりとわめいて、彼女を罪人とし連れて近江へ走らんか。これより他に詮方無し」と下人を呼んで酒を求めて、じやく☆に▼酔って横にうち臥し、しばし眠りをもよおす程に冬の日とて早くも暮れぬ

長き夜なれば酒盛りも初夜（戌の刻）過ぎに収まって、修三は己が愛する女お香を連れて臥所に入り
睦まじげに語らう内に二人はしきりに酔い発して前後も覚えずうまく寝たり。下貝は折良しと廊下
伝いにこの寝屋近く忍び入って様子を見れば、顔を包みし男一人が我より先に壁に浴い、この寝屋
の内へ入りぬと思えば、はっと血煙り立って、あっと二人が叫ぶ声、彼の曲者はしづしづと金の財
布を口にくわえ、女の帯にて血刀を拭い拭い、抜き足して立ちいづる。横顔のはつはうの灯火にて
よく見られるに、昨日の夜に利根川にて我を沈めし横平太なりければ、此は良き所へ来たりしかな
と躍り出て引き止めれば、横平太は仰天して物をも云わず斬り掛かるをかいくぐって、腕首取り、
そのまま刀をもぎ取って、大の男をねじ伏せねじ伏せ、

「昨夜の仇を今宵取る。この通り健やかな顔見たら、さぞ肝が潰れよう。昨日と云い、また今宵男女
を殺して金を盗る重々の大悪人。只金が欲しいばかりか、または意趣でもあってか」と問われて、
しほしほと横平太は

「あれほど縛って沈めたに、つつが無いのは神か仏か。今また驚く大力、早技は一言も御座りませ
ぬ。お香は久しい我らの馴染み。近頃修三に寝返り打って、この横平太は突き出され、悔しさも悔
しく、またお香めを受け出そうと金を持って来た話。聞く事そのまま忍び込み、まんまと首尾良く
しおおせた挙げ句の果てはこの惨め。金は姉御にあげます。命ばかりはお助け」と云いも聞かせ
ず、ぐつさりとお香の刃に貫かれ、そのまま息は絶えにけり。

下貝が懐をさぐれば、昨夜の金もそのままあれど七八両は減りしならんか。修三の金は座敷へ
投げ入れ、百三十両ばかりを別に分けて鼻紙に載せて修三の枕に置き、違棚の硯を下ろし筆早に
書きたる文言。

○一、修三、お香はやきは村の横平太がこれを殺す。横平太は身の仇なれば江鎮泊の女下貝が一刀
に誅伐せり。またこの金は安刀自が修三に借りし元利に足らずば、取りに来たるべしと記して方辺
に挟み置き、安刀自の寝屋へ行けば安刀自はとく目を覚まし、彼方より此方を見て声をも立てず震え
居たり。

下貝は云い励まし、人も大方目を覚まして始終の様子を良く知りたらん。濡れ衣は掛からねども
悲しきは日陰の身、私一人が▼逃げ行かば御身はいよいよ難渋ならん。修三も死ねば金も返す
土産も路用の金も返れば、これよりすぐに出立あれ」とせき立てられて安刀自もうろつく心を取り
直し、かくなる上は是非無しと幸い家伝のひしよ☆妙薬は傍ら離さずここにあれば、さらばお供
をいたさんと、聞いて嬉しく二階を下りて裏手の垣根を押し破り、夜に紛れて安刀自の案内に小道
を横切り横切り、まず市川へと赴いて、お睦の方へぞ落ち着きける。

次の日の朝ひきあけに一番船にて来したる女がこの酒店へ立ち寄るを奥より見れば夏女なり。
下貝は呼び入るに、さて良い所で会うたりとて大箱の背中の腫物が日に浴って腫れ上がり、湯水も喉
へ通らばこそ、頼み少なき有様に初めよりしんぎやうのほふにて☆、御身と一つにこす、虚しく日数
を重ねしを呉竹殿も後悔され、俄かに一昨日近江より急いでいで発ち来たりし由を物語れば、下貝は
まず安刀自に引き合わせ、一昨日よりの事を語り、お睦親子の情けをも、ついでに聞かせて喜ばば、
夏女は甲馬を安刀自に分け与えて腿に付けさせ、

「下貝殿はお睦さんと一緒に後からゆるゆる」と云い捨てて、飛ぶが如く安刀自連れて駆けり行き
ぬ。日に八十里の道を行けば、次の日近江へ早く着き、安刀自は大箱に家伝の薬を与えて、医療の

手を尽くすに十日を過ぎず大方治りぬ。

その頃ようよう下貝はお睦を連れて帰り来たり。喜ぶ事限り無く、これよりただ安刀自もここ山陣に留まって、更に帰らん心無し。

○大箱は心をいらち、またも戦を起こさんとす。呉竹も安刀自も未だ氣力が整わぬに心遣いは大毒と諫められて仁瓶も無く、その年も暮れて春になりぬ。

○太宰府は九国二島の司なれど、備前、薩摩、壱岐、対馬と唐土へ遠からぬ国々よりも来たる官人が常にあり、唐国の風俗を語りければ、近頃より探題信種は唐国の振りを真似て、正月の十五日の夜は上元として我が館、家中の家々下々まで、風流の灯し物を心々に競いて軒に灯さしむ。例えば京国々の盃蘭盆会に異ならず、年々におごりを極めて華やかさ云わん方無く、この夜は尊き卑しきを云わずにこれを見んとて衣服を着飾り、女も男も▼装い立てて夜一夜うかれ遊びけり。

江鎮泊の呉竹はこの十五夜の騒ぎに乗って、謀り事にて太宰府をひと揉みに揉み潰さんと大箱に手立てを語り、去年よりして軍兵を訓練なしつつ、おいおいに筑紫路へとぞ遣わしける。

手長蝦の早潮は太宰府にも久しく在って彼処の案内を良く知ったれば、城下に名高く垂雲楼として諸所より灯籠を持ち寄って比べて酒盛りなす為に構えたる楼閣あり。その二階に忍び入り、合図の烽火を上げる役をまず早潮に任せけり。さても幸目、狩倉は狩人の姿にて猪猿兎を官人のもとに売らせてこの騒動を注進する者を遮らしむ。真弓、杉木は米商人、車を押させて城に入り、東の見附を奪いなむ。黄昏と夕映は袖乞いにやつさせて町家の小路にさまよわせ、危うき方を救わしむ。又、岩居と衣手は旅人にいでたせ、門外の旅籠屋に置き、門番を殺さしむ。妙達と竹世は行脚の尻に、味鴨、夏楊は男の姿に作らせて、彼処のけす☆に立ち交じらせ、騒ぎで同士討ちなさせんとす。蕃は易者にいで立って、打出を稚児に仕立て供をさせ、火具を持たせ、石火矢を放さしむ。下貝と音鳥に案内させて水門より城中へ入れ、芦城の家の利己蔵、加次郎を捕らえしむ。腐鶏、青芝、新玉と胡三郎、紺太郎、損次郎は田舎者の巡礼に似せさせ、芦城の家に火を放させる。女の牢屋は奥深ければ、節柴を奥女中、照鷲を端女にこしらえて奥へ通し福女、花笑に怪我あらしめず玉桐と岩飛葉を預からしむ。これ皆早潮が垂雲楼に火の手を上げるを合図とす。かくの如く手分けして、次第に彼処へやらしむとは夢にも知らぬ探題信種は、

「今年世の中穏やかならねば十五夜の灯籠は一年休むこそ良けれ。もしもかの騒ぎに乗って近江などのあぶれ女が斬り入らば大事に及ばん。さにあらずや」と云われるを聞いて宇野江うち笑み、

「彼女らか故に吉例を欠かせたまうは残念なり、休まば彼女らに笑われん。いついつよりも華やかに▼灯せ」と漏れず触れ渡し、さて私わたしは城の外、とらとびに陣を張り、賊もし来たらば防ぐべし。立浪氏は軍兵を率いて諸所を見巡りあれ。さらば万一近江の兵が攻め来たりとも不覚は取らじ」と事も無げに云いければ、信種は「実にも」と頷いて、

「今年わけて灯籠に花を飾ざれ」と触れられけり。

○江鎮泊には大箱を残して此の度は呉竹を総大将にて、第一の備えは芍薬大将にて韓藍、沢蟹が付き添って黄葉を後備えとす。第二は桜戸、涼風と飛子をば先陣とし、花のついでに後陣に控えたり。第三は太刀野の関屋、面高、袖の香が前に立ち、早蕨を押さえとす。第四は秦名、大鳥と燕を先に

立て、青柳をもて後陣とす。第五は末廣が渡橋と雌雉を従え、第六は力寿にて、枸橋、お剛が左右にあり。第七は稲妻が紫苑、河堀を従えたり。第八陣は埴摺で小充、お紺が方辺にあり、八ツの備えを八度に分け、十五日の夜の四ツの時に一つにならんと約束し、心々に立ちいでつ。

○早潮はとく城下に至り、彼処の古寺、この社と所々に隠れ居て、十五日を待ちいけつ、町々をうかがうに広き町々は灯籠棚にうずまりて、灯し連ね飾り立てたる装いは筆にも及び難し。垂雲楼には数多の男女、鼓の聲、琴の調べ、舞うあれば、歌うあり。更に夜の更けるを知らず、早潮はここにて、田舎だうしやにやつしたる腐鶏に胡三郎、狩人にいでたつたる幸目、狩倉と、これかれに行き会いつつ、なお約束定めて▼垂雲楼に忍びの上り時刻を計って待ち居たり。節柴は照鷲を連れて、亀井の家に居たり、「今宵は何とぞ玉桐と岩飛葉に会わせてたまえ」と乞われて彼女らが気色にも大方は推し計り。否むべき事とも覚えず、奥の牢屋へ案内す。

○早四ツの鐘が響く程に、果たして近江の軍勢が攻め来たって、とらとびの陣も落ちしと敗北し城の内へ逃げ入るに、立浪兵衛は仰天し、見附見附の門うたせ、野森、お貞は手勢を引き具して探題の屋敷へと馳せ来たる。この時に早潮は垂雲楼に火を放てば、黒煙りが天を突き月の光も覆われたり。信種は自ら馬に跨がって火を救わんと駆け出るに、米屋にいでたちし真弓、杉木は火薬を積みし車を押し出し、所を選まず火を投げかければ、火に焼け煙りにおせびつつ、死ぬ者いくらとも計り知られず、「此は叶わじ」と信種は南の門へ逃げ行けば、妙達、竹世が待ち迎え、一振の鉄の棒、二腰の段平に戦う擬勢も無く、信種はまたひっ返せば「幸目、狩倉、これに在り」と寄せ来たるに目もくらめいて安楽寺へと駆けり行く。この時野森、お貞の二人も夏楊に殺され終わぬ。信種は天満宮の宮居に入って隠れんと鳥居間近く駆け来れば、内より打ち出す石火矢の音は天地も揺るがすばかり。古雛、雛形が飛び出て、腐鶏、新玉夫婦らと一つに厳しく追い行けば、青芝と損次郎は安楽寺の屋根に上り、慌て騒ぐ軍兵どもを矢継ぎ早に射取りけり。信種はからがら逃れて立浪兵衛と一つになり、南の見附の櫓に上って向こうを見れば、二つ鞭と印したる差し物立てて芍薬の大群が押し寄せたれば、門をも出られず駆け下りて東へ走れば、末廣、渡橋がまたも南の見附へ帰って力寿の勢さえ加わったり。

ようようここを斬り開けば、左よりは関屋の一群、右よりは秦名の一隊、中に包まれ信種の軍兵は乱れに乱れ討たれる者は数を知らず、立浪兵衛も手を負って、信種もいと危うき所へ字野江が来たってこれを助け、群がる敵を斬り払い、西の方へと落ち行くにも、桜戸の陣中より花的しきりに矢を放ち、稲妻に埴摺の二群れにてひどく追われて雑兵、士卒は或るいは逃げ、或るいは討たれて、主従三人、付き添う者も僅かに何処とも無く落ち行きけり。

○真弓、杉木は信種の館へ行って、あわてる男女をこと如く生け捕れば、夏楊は出口を守って、逃げ出るを一人も逃さず、黄昏と夕映は早くも牢屋の堀を乗り越し、古雛と雛形は牢屋の前にて▼妨げする筑紫勢を斬り払う。節柴は幸女に玉桐、岩飛葉を助け出させ、

「御身たちも心を傾け降参あれば、この上の喜びは無しと云うに、それはもとより我らの望み、かくまでいたわり申せしにて、我が腹中は推量あれ」とおし並べたる玉桐、岩飛葉は少しもやつれし様は無く、久しく日陰に当たらねば、色は雪より真白なるに、薄化粧せし顔の匂い、更に牢屋に

込められし人の様には見えざれば、そのもてなしの懇ろさを云わでも知れる節柴始め黄昏、夕映、
古雛、雛形。誰も驚き喜んで、幸女姉妹の情けの程をぞ感じける。

(傾城水滸伝) 女水滸伝 十五編ノ二 笠亭仙果編次 歌川国貞画

かくて後、玉桐は岩飛葉、黄昏、古雛らと諸共に我が家に帰り、利己蔵らを尋ねるに、「此は叶わ
じ」と加次郎を連れて、この家を逃れ出て、裏門の外もなる川の辺へ駆け来たるに、水門より忍び
入りし下貝と音鳥は等しく出て来て、そのまま押し伏せ、等しく縄をぞ掛けたりける。

玉桐は土蔵を開き、金銀珠玉を取り出して、火薬を載せし車に積み、呉竹の陣へ運ばせれば、節
柴も幸女姉妹を誘い来て、呉竹は戦を収め、下々を犯さしめず、探題の屋敷を焼き捨て、油を絞
って集めし金銀を下々に皆返し与え、勝ち鬨を三度打ち上げ、近江路指してぞ帰りける。

○大箱は呉竹らが帰るのを待ち受けて、玉桐、岩飛葉を助け得たるを大きに喜び、功ある者を重く賞
し、幸女姉妹の志を感じ心なし、さて玉桐に様々の難儀を掛けしを詫び事して、

「既に小蝶が夢に現れ云いつる事もありけれど、なお同じくは玉桐を総大将に据えましかば、山陣
の威光も持たん」と云うを玉桐は驚いて、

「探題に疑われ、せっかく立てし誓言も彼方より打ち消して、理非も正さず責め苛む信種殿には
もはや義理無し。私が意地を張りしにより、数多の人の命を損じ、今更悔やおに甲斐も無し。今よ
りは心を傾け、姫君のお味方申さん。さりとして名のある女中達の上にはいかがお居らるべき。まして
や姉の後なりとして総大将など思いも寄らず、たつと仰せがあるならば、自害して死ぬより他にし
ょうも無し」と云いければ呉竹は頷きつつ、

「小蝶の刀自の告げもあり、玉桐さんへはいかがなれど、今参りのお前がすぐに総大将となる時
は人の心は十人十色、下人に伏せぬ者もあらん。仮に第二の座に居たまえ」と云えども玉桐はなお否
み果てし無ければ大箱曰く、

「さらばこのまま座席を定めず、客分にて差し置いて、小蝶の刀自の吊い戦をせし上にとにかく
も確かには定めん」とて座席の定めは延ばし置きつ。

○まことや、継子の加次郎は道にてある夜人目を忍びんで舌を嚙んで死に失せぬ。利己蔵に身を任
せ、継母に憂き目見せしを今更に悔しみなるべし。年端も行かぬ子供なれば玉桐も殺さんとは思
いも掛けねば、これを見てしきりに涙を流しければその余の者も哀れをもよおし、呉竹はその健気さ
を感じて篤く葬り得させつ、利己蔵は「尚、もしも、又、逃れる術もあるべきか」と守りの軍兵を
欺いて、口任せの事を語り、或るいは泣き、或いは口説けど誰あつても取り合わず、近江へ着いて
三日目に玉桐が新身を試しがてらに遂に首をぞ斬り捨てける。

○信種は太宰府の焼け跡へ立ち帰り、ここ彼処を繕って辛くして屋敷を営み、元の如くにここに住
み、この由を都へ相聞せらる。

○「まことや、先に善光寺へ御使いに立ちたりし門田の内侍は穂波の宰相は豊秋卿の息女なるが、
実は院の御胤なり。されば賊にて大切な品々を大箱らに貸し与え、贈り物を受け収め、その後
都へ立ち帰って在りのままに相聞ありしが、勇婦どもにせがまれて、よんどころ無き事とは云えど、
云うままになって居たりしその罪いかでか逃れるべき。さこそは皆の女ども、様々に説きすかし、
いか様なる事を云いしか知らず、このままに差し置いては朝廷の御大事、早々罪を定めさせたまう
べくや」と六波羅より泰時が申しいでたるを龜菊は聞いてうち案じ、
「私もさこそ思えども、他でも無い門田の局。我が心にも任せ難し。良からぬ者を代参に遣わし
たりと後悔しつつ天機の程をうかがいければ、院の御所は聞こし召し、
「実に罪無しとは云われざれど、彼の時とかくに争えば、瓔珞、華鬘も破却され、龜菊の願も虚し
かるべし。武芸は元より力とてはぐごのたかつき☆、ききぐるさえたゆげに見ゆる優女由。けしか
らぬ心を持つとて恐れるに足る事あらん。まげて御許し置くべし」と仰せいださせたまひければ、
いかにとも術も無く、そのまま元の内侍に据え置いて、指を指す者も無し。

○これはさて置き、太宰府の相聞、返詞も捨て置かれずと公卿数多が院参あって様々と評議に及ぶ、
椋橋の龜菊も御簾を隔てて上座を占め、北条泰時も末座に連なりたり。穂波宰相は進み出て、六波
羅より選り出せし閑屋もたちまち敵に下りぬ。それより先に芍薬らも皆々彼処へ味方して彼女らに
威勢を作るのみ。討っ手を出す度毎に帝の光りを暗まかし、最も不便の事どもなり。但し、彼女ら
は三世姫を守りたてて世にいだすと、年頃犯せし罪咎の赦免を常に待つのみにて、帝へ敵対する者に
あらねば、三世姫に館をたまひ、何となりと名を付けて彼女らの罪を許され、北条一ツ家と和睦な
さしめ、国々の大名にその勇婦らを引き分けて三人四人と諸所方々へ抱えさせれば、彼の輩は散
り散りになり行って、大事をしいだし申すまじ」とはばかり無く宣えば、龜菊はうち腹立て、
「門田の局が欺かれし、その口移しを宣えど、柑壠を動かし太平の世を騒がすはこれ朝敵。例
え少しの道理ありとも御赦免あれば、▼この上に謀反の輩ある時に、何の意をもて追罰せん。愚か
な事な宣いそ。お控えあれ」と云い込めて、その後出仕を留めけり。

○「ここに近江神崎郡の観音寺の城の主、佐々木判官の秘蔵する女武者二人あり。水波能目細波、
迦具土熾島と申す。彼女らは希代の女にて、細波は水を使う術を知って人を溺らし、熾島は火を
良く使い、神火をもって陣を焼く。哀れ彼女らに命ぜられて江鎮泊を攻めさせたまえば、閑屋らに
優るべし」と泰時が申し上げれば、それこそ良けれと龜菊はその由を申し伝え、近江の判官呼び出
して出陣の旨命じけり。

○江鎮泊には常日頃、都へ忍びを入れ置けば、この事詳しく告げ来たるに、閑屋は細波、熾島も友
達にてありければ手並みの程もほぼ知るたり。かれより此方へ寄せぬ先、観音寺へ逆寄せし、彼女
らを降参さすべしと例の面高、袖の香を率いて出陣したりけり。

呉竹は危ぶんで、桜戸、青柳を大将となし、早蕨、黄葉二人を添えて閑屋の後より遣わしけり。
この時力寿が進み出て、我も行かんと云いければ大箱は笑いつつ、
「歴々の大将が討ち発ちしその中へそなたが行っても手柄は無く、また諍いでも取り出しては返っ

て戦^{いくさ}の邪魔になる。必ず行くな」と止めれども、なおも争い行かんと云うに、我が軍令^{ぐんれい}を背^{そむ}けば、頭^{こうべ}を刎^{はね}んとたしなめられて、是非^{ぜひ}無くこの場を立ちけるが、心更^{おの}に収^{たずさ}まらず、遂^{つひ}に二つの斧^{きりぎりす}を携^もえ、
▼雑兵^{ざつべい}一人も従^{したが}えず、山^{やま}を密^{ひそ}かに下^{くだ}りけり。

次の日力寿^{りきく}が山に在らねば大箱^{おほひら}は大きに驚^{おど}き、早潮^{はやしほ}、彩雲^{いろくも}、照鷲^{てりうそ}、お睦^{むつ}を諸所^{しよしよ}へ分^わけて、追^おっ手にやれど行き違^{ちが}いて、遂^{つひ}に会^あわず、力寿^{りきく}は道^{みち}を急^{いそ}ぎ行くに、次の日は僅^{わずか}かに持^もちし路用^{ろよう}も尽^つき果^はて食事^{しょくじ}もならず、犬神川^{いぬがみがわ}の辺^{ほとり}の酒屋^{さか}へ駆け入り思^{おも}うままに酒^{さけ}うち飲^のんで酒手^{さかて}を請^{まね}われ、銭^{ぜに}は帰^{かえ}りと立ち去^さるを主人^{しゅじん}は雲^{くも}を突^つく如^{ごと}く大きなる男^{おとこ}にて、江鎮泊^{かうちんぱく}のてだな☆など脅^{おそ}し掛^かけ、力寿^{りきく}に斧^{きりぎりす}にて頭^{あたま}を割^わられぬ。此^こは腕白^{わんぱく}の量^{りょう}ハとて、この辺^{あた}りの溢^{あふ}れ者^{もの}なり。人殺^{おんらい}しと家の者^{おや}に呼^よび叫^こばれて、往來^{おうらい}も通^とりがたく堤^{つみづた}伝^たいに小道^{せうだう}を走^はり、思^{おも}わず道^{みち}を踏^ふみ違^{ちが}え、たがの社^{たが}の方^{やしろ}へ走^はり、とみをとか☆云^いう辺^{あた}りにて、我^{われ}に劣^あらぬ大女^{おほんな}に顔^{かほ}を見^みられてうち腹^{はら}立^たち、つい一打^{ひと}ちと振^ふり上げる拳^{こぶし}を取^とられて敵^{かた}し難^{がた}く、侮^{あなど}り難^{がた}き大力^{おほりき}に驚^{おど}いて我^{われ}も名^な乗^{のり}り、観音寺^{かんのんじ}の寄^よせ手^ての中^{なか}に加^かわらぬ残念^{ざんねん}さに後^{あと}より一人^{ひとり}山^{やま}を下^{くだ}り、手勢^{てせい}も具^ぐせず来^きたりし由^{よし}、また酒店^{さかみせ}の主人^{しゅじん}を殺^{ころ}して逃^にげるに任^ませ、道^{みち}に迷^まいし由^{よし}をも包^かまらず語^{かた}りければ大女^{おほんな}は笑^{わら}いつつ、

「さて気味^{きみ}の良^よき女^{にょ}中^{ちゆう}かな。我^{われ}はこの国^{くに}の伊勢境^{いせざかい}の木地村^{きじむら}の杣^{そま}の娘^{むすめ}で尼寺^{にじ}の弟^{てい}子^しなりしが、女^{にょ}だてらに相撲^{あひま}好き^{ずき}、没^{めつ}面目^{めんぼく}お焦^{あせ}とて、あだ名^{あだな}の付^ついた似^に非^ひ比^ひ丘^{きう}尼^に。御庵主^{ごあんしゅ}に勤^{ごん}当^{とう}されて髪^{かみ}を生^はやして、一^{いっ}所^{しよ}不^ふ住^{じゆう}（放浪^{ほうらう}）、今^{いま}でもあだ名^{あだな}は没^{めつ}面目^{めんぼく}お焦^{あせ}とて、女^{にょ}のごろつき。強^{しづ}い女^{にょ}に生^はまれるからは賊^{しづ}の砦^{とりで}は及^{およ}ばずとも、こ^こより近^{ちか}い釈迦^{しゃか}が岳^{たけ}の麓^{ふもと}に近頃^{ちかごろ}砦^{とりで}を構^{かま}えし、藁^{わら}弁^{べん}慶^{けい}干^{かん}魚^{ぎょ}とて評判^{ひやうはん}のある女^{にょ}の豪傑^{ごうたけ}。あの山^{やま}へでも加^かわって働^{はたら}いたら面白^{おもしろ}かろうと思^{おも}いたち、日^ひがかといでよし。この頃^{ころ}うち遊^{あそ}んでいた、さめがいから☆昼寝^{ひるね}の顔^{かほ}も洗^{あら}わずに、駆^かけ出^でして道^{みち}連^れれ欲^ほしさに、たくましい女^{にょ}と顔^{かほ}を見^みたのが始^{はじ}まり、▼互^{たが}いに短氣^{たんき}は我^{われ}らの持^もち前^{まへ}、思^{おも}わず知^しらずぶち当^{あた}ったも悪^{わる}い心^{こころ}でしたでは無^なし」と云^いうに力寿^{りきく}も心^{こころ}解^とけ、

「その干魚^{ほしな}はどれ程^{ほど}の手下^{てした}があるか知^しらねども、同^{どう}じくは我^{われ}が賊^{しづ}の砦^{とりで}へ加^かわって忠義^{ちゆうぎ}を尽^つくせば、強盗^{かうとう}、引剥^ひぎの悪名^{あくみょう}受^うけず、美名^{びめい}を末世^{まつせ}に残^{のこ}すべし。同^{どう}心^{しん}ならば我^{われ}らと一^{いっ}緒^{しよ}に観音寺^{かんのんじ}の城^{じやう}に向^{むか}い、みせに水火^{すいか}の二人^{ふたり}の勇婦^{ゆうふ}に驚^{おど}かしてはいかに」と云^いえばお焦^{あせ}はしばしうち案^{あん}じ、

「そりゃ閨屋^{せきや}とやらが大军^{おほい}で向^{むか}かわれたではあろう。なれど云^いい合^あわせも無^なく只^{ただ}二人^{ふたり}で斬^きって出^でんは無^な分別^{ぶんべつ}とあつて、閨屋^{せきや}の陣^{じん}へ入^いっては我^{われ}がままには働^{はたら}かれじ。釈迦^{しゃか}が岳^{たけ}へま^まず行^いって、干魚^{ほしな}もこ^こちへ味^{あじ}方^{かた}させ、あの砦^{とりで}の手下^{てした}を引^ひき連^れて、ひどく攻^せめたら佐々木^{ささき}勢^{せい}は不意^{ふい}を討^うたれて敗北^{はいた}せん。釈迦^{しゃか}が岳^{たけ}へま^まず行^いく事^{こと}」とお焦^{あせ}の云^いうが道^{みち}理^りなれば、力寿^{りきく}もこれに従^{したが}って伊勢境^{いせざかい}へぞ赴^{おもむ}きける。

○既に閨屋^{せきや}は観音寺^{かんのんじ}の城^{じやう}の此方^{こなた}へ押^おし寄^よせれば、近江^{おうみ}の判官^{はんがん}は大^{おほ}いに怒^{いか}り、早^{はや}くも軍勢^{ぐんせい}もよおして、佐野^{さの}という所^{ところ}へうちいで、両陣^{りやうじん}既に相向^{あひむか}かえり。細波^{さざなみ}は水波^{みづは}能^の目^め、熾^{おき}島^{のしま}は迦^か具^く土^{つち}と銀紗^{ぎんしゃ}に縫^ぬうたる差^さし物^{もの}立^たてて、華^{よろ}やかに鎧^{よろい}いて、ま^まっ先^{まへ}に進^{しん}んだり。

閨屋^{せきや}は見^みるより一^{いっ}礼^{れい}し、
「久^{ひさ}しう候^{こう}、二人^{ふたり}の君^{きみ}達^{たち}。大箱^{おほひら}の忠義^{ちゆうぎ}に感^かじ、私^{わらわ}も賊^{しづ}の砦^{とりで}へ入^いりぬ。願^{ねが}わくばお二人^{ふたり}も砦^{とりで}へ誘^いいませたく、わざわざ迎^{むか}えに参上^{さんじやう}せり」と云^いうを二人^{ふたり}は聞^ききながら、

「あぶれ女の集^{あひ}まり勢^{せい}が忠義^{ちゆうぎ}などとは事^{こと}可^か笑^{しょう}し。朝^あ廷^{てい}の勅^{ちやく}を受け、討^うつ手^てに向^{むか}う佐々木^{ささき}の判官^{はんがん}、その先陣^{せんじん}をこ^こうむる我^{われ}々に味^{あじ}方に付^けとは汚^{けが}らわし。こ^こまで来^きたるは火^ひに入^いる虫^{むし}、逃^{のが}しはせじ」

と斬りいづれば、袖の香とおもだか馬をとばして駆けいでつつ、熾島と細波に渡り合って戦う程に熾島も細波も叶わじとや思いけん、引き色になりければ、勝つに乗っても面高、袖の香、追ひ行く程に両方より伏せ勢起こって、鍵縄にて馬の足を引き倒せば、面高も袖の香も馬より落ちて生け捕られぬ。

関屋はしきりに苛立てども二人を救う力も無く、憂い悶えて茫然たる色目を見て取り、佐々木の軍勢まっしぐらに突き入ったる勢いがあたるべくもあらねば、関屋は士卒を励ませど、崩れかかって敗北し、関屋も既に危うき折しも桜戸、青柳がこの時にここへ馳せ着き、新手をもって横槍を入れしかば、佐々木勢もうち乱れ、「此は叶わじ」と引き返す、水火の二将は生け捕りを牢輿にかき乗せて、そのまま都へ遣わしけるが、清水がはなまで来たりしに力寿は既に干魚とお焦を味方に付けて、釈迦が岳の小盗人を多く従え□□ところまで来たりしが牢輿を見てはっと思ひ、鐘太鼓を打ち鳴らし警護の中へ▼駆け行って、遮る者を斬り倒せば、「此は叶わじ」と雑兵らは牢輿を打ち捨て逃げて行き、力寿が板戸を引き破れば喜びいづる面高、袖の香。有りし事ども互いに語り、これより五人一つになって観音寺の後ろへ回りぬ。

○桜戸と青柳の助けによって、太刀野の関屋は再び勢い朝日の如くに城門間近く押し寄せれば、細波はまた賭け出て関屋と刀を合わせけるが関屋はわざと負け色見せて山道指して逃げ行けば、細波は逃さじと追ひ行くまに、辺りには人氣無きを見すまして、関屋はたちまち勢い加わり、激しき矛先当たり難く、細波は戦い負けて馬より落ちるを関屋はそのまま引き上げて、塵打ち払い、芝生の上に座らせて、

「今殺すには易けれど、いかにしても御身達を味方に付けたく思うにより、わざわざここまで引き入れたり」とて大箱の所業を語り、また亀菊、義時らの邪を詳しく論し、私とても始めの程は盗人よ反逆人よと悪口せしが、今は恥ずかし、百人近き女の英雄、さて集まるも集まって互いに仲良く暮らす事はこれ只事に余もあらじ。よくよく思案を巡らして、姫上に御味方あれ」と言葉を尽くせば、細波もたちまち心を翻せば、そのまま誘い陣所に帰り、合戦の勝負は云わず、人無き所へ誘い行き、道理を説いて諭せしかば、昔馴染みの嬉しさは遂に味方になられしとて、我が身の手柄は少しも語らず、この計らいを知る者は細波一人で在りければ、その嬉しさはいかばかりならん。桜戸も青柳も大きに喜び親しくなるにも、面高と袖の香をいかにして助けんと▼その事のみ憂いけり。細波が降参したりしかは熾島は怒りに耐えず、日頃の手練の火術を施して、関屋の陣を焼きたつれば、細波は愛知川の水を引かせて奇術をもて、たちまちその火をうちしめせば、熾島は心慌てて城へ引かんとする程に、力寿らの五人の兵が後ろの山より城に火を掛け、早城中に乱れ入れば、判官も一足いだし、八幡山へぞ落ちられける。

熾島は辺り近き常楽寺に閉じ籠もり、門を固く閉ざして固く守って戦わず、攻め落とさんは易けれど関屋はあながち戦いを好まず、細波を遣わして、また自らも寺へ赴き、熾島をも遂に説き伏せ、無二の味方にしたりけり。これより力寿ら五人とも一つになって帰陣するに、大箱、呉竹その余の者ども、関屋の手柄を誉め立てければ、大箱は更にまた力寿の罪を正さんとし、彼女も掟を背きしものの、この度はその手柄少なからねば、さし許し密かに褒美を与えけり。

水火の二人、干魚、お焦とまたも四人の豪傑を味方になして、砦の勢い日に添えて、勝りゆく

にも、先に馬を求めんために竹澄たけすみに山桃せきちくと石竹を添えて信濃へ遣りしが、彼女らは虚しく帰り来たり。

「仰せに任せ良き馬を百匹余り買い取って、まかり帰り候ところ、関ヶ原にて衣通そとおしの軍勢がまたも遮さえぎって、彼女らがこどもに斬り立てられ、無念ながら一匹も残らず奪い取られし」と面目無げに告げければ大箱は齒嚙みをなし、

「去年に今年に重なる遺恨、小蝶の刀自の弔い戦。今は返詞も延引ならず」と夏女なつめと早潮はやしおを衣通そとおしへまず遣わして、彼方の様子を見せしめければ、夏女は早く帰り来たり、

「彼の馬どもは法華寺の広庭に追い立てたり。またかの寺に中軍の備えを立てて、村の口々に大旗小旗をひるがえし、いと嚴重なる要害なり」と告げれば早潮は言葉を継いで、

「まず本陣には軍師ほんじん渋谷女しぶきめ、軍兵を五手に分け、北の陣には姉道芝あねみちしばが糠江と共に守ったり。南は寒川、西は縄則なわのり、東は魁ちゆうぐん、中軍は乙娘の豊栄は父弄大夫と一つなり。また播州飾磨の生まれ、せいしう

すずか☆に追い剥ぎなしたる女盗賊家鎮染幾入とて、名は優しく姿は凄き大女。身の丈高く腰太く、天晴れの女丈夫が味方に加わり、威勢を添えたが、また彼の地の理はしかじかなり」と詳しく告げるに、玉桐は進み出て、「此の度は私に先陣を任せてたまえ」と請いければ、呉竹はこれを留め、

「御身は土地も不案内、姉の仇を▼討たんとのみで逸って万一怪我あつては取り返しのならぬ事。藤川辺に忍び居て、石火矢の響きを合図に急ぎ駆けいで戦いを助けたまえ」と大事を取れば、大箱も玉桐を先に立てて、渋谷女を生け捕らせて手柄を示し、人に帰伏をなさしめんと思えども争うべくも無ければ、その意に任せて音鳥を従えさせていで立たせつ、さて衣通の五陣へ向かう。

大將は誰々ぞ、南の陣へ秦名、花的に涼風、飛子の二人を添え、東へは妙達、竹世に黄昏、夕映これを助く。北へは青柳、衣手に今板額と女鬼なり。西へは朱良井、稻妻に古雛、雛形が相添うたり。

中陣へ向かう者は大箱、呉竹、薯の三人、筒鳥、薄衣、幸目、狩倉、夏女、早潮が尻辺に付いて、後陣は力寿、埴摺に小充、お紺を従えたり。各々数多の軍兵を引き連れて、衣通村へ押し寄せつ、

かくと聞くより弄大夫は渋谷女が云うに任せ、入り口の所々に落とし穴を深く掘らせておびき入れんと巧みたり、とく☆より早潮忍び入り、穴ある所に印をして、その由詳しく注進せり。呉竹かくと諸軍に知らせ、手筈を定めて五手の軍勢が鬨の声をひとしく上げ、石火矢を撃ちかけ、貝、鐘、太鼓をしきりに響かせ攻め寄せたり。

渋谷女は四方の陣をいづれも危うく攻めたてられて、うち驚いて手勢を分けて方々を救わしめ、自らは本陣にて大箱らが攻め入るを待って引き入れ、穴へ落とし皆殺しになさんとす。

既に大箱、呉竹ら、軍勢のは近寄れども落とし穴の辺へは寄らず、衣通の者どもを中に取り込め、彼の穴へ入れん入れんと攻めたつる。勢いあたるべくもあらねば、てもりを食らう衣通勢は落とし穴に入る者多く、色めき立ったるその所を車に積みし焼き草に火を移して投げ入れ投げ入れ、薯が祈る道術に大風たちまち吹き起こり、火炎は四方へ▼飛び散って、衣通の構え構えに火の掛からざる所も無し。思うままに勝利を得て、大箱らはまず引き返し、その日は休息したりけり。

渋谷女は火をしめさせ、破れし陣を繕わせ、少しもひるむ気色無く、また次の日も合戦に及ぶに、道芝は薄衣と筒鳥の二人と戦えども、更にまくべき様にもあらねば、花的いらって一矢を放せば、道

芝は肘を射られ、馬より落ちて討ち死にす。妹の豊栄は目の前で、姉を討たれてたまり得ず、弓矢を手挟み駆け出るを力寿は鉞うち振って迎えば、豊栄は弓に矢番い放つ矢は力寿の腿に当たり、

力寿は鉞うち振って迎えば、豊栄は弓に矢番い放つ矢は力寿の腿に当たり、

力寿は鉞うち振って迎えば、豊栄は弓に矢番い放つ矢は力寿の腿に当たり、

力寿は鉞うち振って迎えば、豊栄は弓に矢番い放つ矢は力寿の腿に当たり、

いたで
痛手を負ってぞ逃げ帰る。

またの日は渋谷女、彼の玉獅子の馬に乗り、秦名に一槍当てれば、大箱は憂い嘆き、陣を収めて固く守るに、蕃は此の度のしじ☆の勝負、良きか悪しきか占うに吉なれども、今一度驚く事あらんとなれば、もしは夜討ちを掛けられんかと、その手配りをなしけるに、果たして敵は勝つに乗り、その夜二更の頃(亥の刻)おいに糠江、寒川、繩則らが大箱の陣中へ勢い鋭く攻め入るに、かくぞと待ちし、幸目、狩倉は前より現れ後ろより花的らの中に挟み攻めたてたれば、夜討ちの軍兵残り少なに討ちなされ、繩則も狩倉の矢先にかかって死に失せぬ。弄大夫は泣き悲しみ、渋谷女も憂い悶え、仮に和睦を調べて、その上、知略を巡らさんと弄大夫より大箱へ和睦の文を送りけるに、大箱は文を見て怒り罵り引き裂けば、呉竹は押しなだめ謀り事を囁いて、返事を書かせて遣わして和睦の一議が調いければ、かくては互いに人質を取り交わさんと弄大夫▼は再び文を送るにより、呉竹はまた計らって、早潮、力寿、埴摺、小充、お紺の五人を遣わして、これにも機密を云い含め、この時に山陣へ予て加勢を催促せしかば、関屋、除夜、熾島、細波も陣へ入りぬ。

弄大夫は人質の力寿らを法華寺へ送って、固く守らせ置き、大箱より請うに任せ、豊栄と幾入に奪い取りし百匹余りの馬を残らず添えて返しぬ。されども始め竹澄の手より盗みし玉獅子は渋谷女に与えしとて、これを留めて返さねば、大箱は豊栄に文を書かせて請いにやれど、渋谷女は更に返えさずして、いよいよこの馬欲しとならば、江鎮泊へ帰陣あれ。さらずば決して渡さじ」と云う、かかる折しも観音寺、八幡山の佐々木勢が攻め来たと聞こえければ、関屋に水火の二人を添えてその方を防がしめ、それに乗って呉竹は謀り事を行なわんと大箱に囁けば、大箱は幾入を呼び出して、言葉を尽くして味方に付けて謀り事を云い含め、衣通へ帰しやりつつ、幾入は弄大夫に向かい、「大箱が和睦謀って実よりいづるにあらず。またこの程は佐々木家より寄せると聞いて当惑し、心も更に心ならず。弱味に付け入り、人も身にも見つければ、勝利は目の前、この事を告げんため、逃げ帰って候」と真しやかに欺いて、

「その後にならば、豊栄殿も怪我無くお救い申さん」と云われて喜ぶ弄大夫。知恵たくましき渋谷女も運の尽きとて疑わず、幾入は法華寺へ行って、五人の女にも謀り事を云い含めつ、かくとも知らず渋谷女は寒川、魁、糠江と共にその夜再び夜討ちを掛けるに、陣の門も閉ざさず、その様何とも怪しければ、はっと思つて引き退く、時しも己が衣通村に一大事こそ起こりけれ。早潮時を見計らい、法華寺の酒楼に上り、▼早鐘を突く程に石火矢四方にうち響かし、力寿、埴摺、小充、お紺がひとしく抜き連れ斬ついで、中軍に攻め入れれば、弄大夫は防ぎかね、腹かき切つて失せにけり。

夜討ちにいでたる軍勢は例の伏せ勢が群がり出て、或るいは生け捕りうち殺せば、助かる者は稀なりけり。寒川は朱良井に討たれぬ。魁は乱軍の中にて名も無き雑兵の槍先に命を落としぬ。糠江は妙達、竹世に追われ、青柳、衣手に向かわれ、深手を負つて逃げ行きつつ、流れ矢に当たつて死に失せ。又、豊栄はこの戦果てて後、大箱の陣にて首を刎られけり。

○これより、渋谷女の最後の様、詳しく下帙の始めに載せたり。目出度し、目出度し。

衣通の戦は遂に破れ、弄大夫は自殺して、五人の娘の糠江も討たれ、一人残るは渋木女のみ。されども勇気を更に落とさず、ひとまずこの場を落ち延びんと矢も鉄砲も恐れぬ玉獅子をしきりに鞭打ち、群がる敵を跳ね飛ばし駆け悩まして、ふち川☆指して急ぎ行く。折から、とある林の内より攻め鼓をしきりに打ち立て、多くの軍兵が現れ出て、遮り止めれど事ともせず、打ち物を踏み折り蹴散らし駆け行く先に怪しの人影。目を留めてうち守れば在りしに変わらぬ小蝶の姿。はたと睨まれ身の毛立ち、顔を背けて思わずも後ろへ退く此方には浪鼓音鳥が弓に矢番え待ちかけたり。此は便無しと横道へ入らんとする時に玉桐がいと華やかに装いたてて道中に立ち塞がり、

「遅かりし渋木女。我は小蝶の妹玉桐。筑紫の家をうち捨てて賊の砦に加わりしより、汝を討つて姉の菩提を弔わんと思わぬ日は無し。人証に勝負をせよ」と槍おっとり延べて突き返れば、逃れぬ所と渋木女も駒を留めてにっこちうち笑み、

「玉桐と云う妹が小蝶に在りしか知らねども、なるほど小蝶は我が毒矢でお目出たくなったそう。仇討ちとは奇特、奇特。しおらしき心に免じ、姉の様に苦しませず、この薙刀でひとすくい、弥陀の浄土へすくい取り、楽な身体にさせてやる」とあくまで嘲り、身を捻り大薙刀をひらめかし、□□もあらせず斬り込むを玉桐は受け流し、□□□□秘術を尽くし、三十余合に戦いし□□□□力尽き、隙を見合わせ□□□するを玉桐いらって突っかかる、□□□□ぐっさと抜かれ、たまりもあえず□□しゆよりどうと落ちれば、雑兵ども高手小手にぞ縛める。後へ回って控えたる音鳥は玉獅子の轡を取って主人に従い、本陣指して来たりければ、▼大箱は思いし如く玉桐に仇を討たせて心の喜び上も無く、勝ち鬨三度上げさせて戦を収め砦に帰り、小蝶の墓の前にして、渋木女の頭を刎させて、血潮を洗い霊前に供え、花を立て香をくゆらし、僧を招いて経を読ませ、一同に礼拝し、更に涙に袖を濡らしぬ。

○さて大箱は呉竹始め各々に向かって曰く、

「小蝶の刀自の遺言に我が仇を討たん者を総大将の位に据え、姫君を守護させよと云われしを各々達はよもや忘れはしたまわじ。いずれの人ともあるべきに、血を分けしその妹の玉桐殿の手に落ちて、渋木女は遂に戦い負けぬ。さればとかくの沙汰に及ばず、玉桐殿を今よりは総大将と仰ぐべし。違背はあらじ」と云いければ、人々は顔を見合わせ、受け引く顔は一人も無し。玉桐は大きに驚き、遙か下がって頭を下げ、

「昨日今日の私は新参。渋木女一人生け捕るばかりで忠義も尽くさず功も立てず、まア何程の徳あって、各々様をうち越して総大将など申す事は余りに思いもかけぬ仰せ。姉が末期にいかような遺言せしとて何ともまた、それに従い申さるべき。決して御受けなし難し」と否めば大箱また曰く、「さな宣いそ。小蝶の刀自の遺言はとまれかくまれ、私は元卑しき書役、才覚つた無く力も無く、武芸は知らず、この通り顔も醜く、一つとして人の上に立つべき徳無し。ただ各々にあいせられ、ここに久しく籠もり居る。それ故に自然と押し上げられて、心ならずも月日を送れり。御身は武芸も力も優れ、姿形並みに秀で、天晴れの総大将。近きに義兵の旗上げせん。期に至っても、かくてこそ義家君の忘れ形見の三世姫が頼ませたまう女武者よと京鎌倉の敵の目を驚かさめ、否まず受け引きたまうべし。立ち退かんなどとはおくび(げっぶ)にも出したまうな」と云えば玉桐いよいよ

ひれ伏し、

「この事ばかりはどうあっても」と固く否んで受け合わず、呉竹は席を進み出て、

「大箱主はこの年頃、世の人に慕われてとりでに在りとある者も皆心より信服して小蝶の刀自の世に在りし頃より、自然と崇め尊とみ、総大将の思いをなせしも、忠義と云い、信義の徳は上無きによってなり。我々始め数多の女は玉桐殿に▼恨みも無く、また卑しむと云うにあらねども御身を越して総大将になりたらんには誰々も本意無き事に思うべし。さりとて小蝶の刀自の姉妹の御影にまこと大将の器量備われれば、三四とは下げられず、第二の座こそ相応しからめ。小蝶の刀自も筑紫にて夢に現れ、遺言を後悔されしと自ら語りたまうにあらずや。謙退辞讓も時による。離れ離れに人心なればとりではたちまち乱れ、姫君への大不忠、さにあらずや」と諭されて大箱は頭をかき、

「真にそれはさる事なれど、彼の夢とても我が見し夢。疑う人は大箱がかこつけ如く蔑むべしと後悔せしを常に悔やめり。そこらも推量あれ」と云い、なお抗えは聞きかねて、力寿は席を躍り出て、

「ともかくも云えば云う程、賢人立てをする様でこの力寿には不得心。呉竹さんの云わしゃる通り、玉桐さんには意趣、遺恨はちっとも無けれど、今日になって大事の大事の姉御の上を越えさせては腹の虫が承知をせぬ。たつとならばそこら中を荒れ散らして、こちどら仲間と一緒にとりで、砦を立ち退くより他のしやうわまア無い」と気色変われば、

「我々も力寿が申すにちっとも違わず。呉竹殿もござれども、大箱の刀自の他に大将ができるなら、とてもここに居る気は無し」と竹世も云えば味鴨も、

「小蝶の刀自に引き上げられて今此の砦に不足無く暮らすも、元は大箱様のお陰によれば、二方の恩に勝りも劣りも無く、小蝶の刀自に繋がる縁の玉桐さんなりや、粗末には思いはせぬが大箱様の上にはどうも据えにくい」と云う隣より妙達尼も、

「何事も背かねど、こればかりは大箱御前、この尼も力寿の味方。その相談にはどうも乗られぬ。いよいよそれに決まるなら、この鉄棒で砦を砕き、姫君を背に負って、らんめい☆しだい他へ行く」と口々に喚かれて、▼大箱も言葉無く手をこまねいている所へ、朱西と枸橋が思わずひとしく入り来たり、代わる代わるに告げて云う様、

「行き来の者の申すには、都より討つ手の軍勢がまたも出立致せし由、大将は二人にて共に若き女武者。一人は二本杉古河とて、大和の生まれで文武の道に暗からず、長き短き二筋の槍を一度によく使い、ことに美人の聞こえ高く、女武者所に一二を争う兵と申す事。いま一人は礫石芳野とて、年いと若く撃つに妙を得たり。この二人は軍兵を二手に分けて都を出て、古河は八幡山の佐々木氏に縁あり観音寺の判官がさる頃の戦にうち負けしを口惜しき事に思い、古河に城を貸し、本陣とせさせるのみか、数多の士卒を加勢として戦の駆け引き、調練最中。まつた芳野は元この国の坂田の郡の生まれにて、伊吹大平の城主たるこれもまた佐々木の一党、大ぜん殿☆に縁あれば、大平に馬を留め、両軍一つに押し寄せて、この山陣を短兵急に攻め落さんとの手段の由、よも偽りには候わじ。うち捨てて置くものならば、屋敷大事に候わん」と注進すれば、大箱、呉竹、各々もうち驚くこの時に三世姫はこの由も最前よりの争いもとく聞こし召し、園喜代をして呉竹に仰せ付けられける様は「八幡山と大平に討つ手の兵がたむろする由、此方より逆寄せして、例の如く脅かすべし。同じくは大箱と玉桐が頭となり二手に分かれて敵を定め、二つの城へひとしく押し寄せ、早く敵に打ち勝つものがこの所の主人になって、我を守立てくれよかし。さあらば例え玉桐が大箱

の上を越すとも、誰も恨みはあるまじ」との仰せなりと云いければ、呉竹はにっことうち笑み、
「此は私無き御計らい。各々違変あるべからず。御籤を上げて神慮（天意）をうかがい、何方の城
へでも向かいたまえ」と云いければ、大箱は玉桐は是非も無く、それより天地の神を拝し、籤取り
をしたりしかば、大箱は八幡山、玉桐は大平へ行くべきに定まりぬ。さらばとて戦を起し、大箱
は桜戸、花的、味鴨、衣手、除夜はじめ、燕、筒鳥、薄衣、韓藍、沢蟹、黄昏、夕映、幸目、狩倉、
腐鶏夫婦、新玉夫婦に青芝夫婦、石竹、幾入、お睦、竹澄の二十四人を従えり。水軍の大將は二網ら
姉妹なり。玉桐には呉竹、蕃、関屋、芍薬、あからい、稲妻、索城、青柳、面高、袖の香、細波、熾
島、▼音鳥、山桃、大鳥、打出、涼風、飛子、しゆに☆、埴摺、小充、お紺、はやせ☆、白粉。船手
は琴樋、日熊、龍間、かくの如く相従い、残りの諸將は皆に留まり、姫君を守護なしたり。

さて大箱は八幡山より程遠からぬ清水がはなに陣を取り、諸將に向かい、
「古河は予て聞く女武者にて若けれど、侮り難き大敵なり。細波、熾島などはひとつら☆にて云
い難し、同じくは道理を述べ、戦わずして降参させれば、これにます喜びあらじ。一通の文を遣わ
し、その様子を試みん。誰かこの遣いをば、すべき者は」と見渡せば幾入が進み出て、
「さる所にて古河はいで会いて知る人なれば、我このお使者を勤めるべし」と云い切らぬに、また
一人、「我も共に遣わしたまえ。お味方申して何一つ功を立てたる事は無し」と云うは下総市川より
従い付いて上りし、百錢婆のお睦なり。大箱は細やかに言葉を尽くして、文書きたためて、そ
の二人を城へ遣わす。

○佐々木氏は古河と戦の評議なしたりしが、彼の文を読み下し、「いかにせん」と古河に問えば、
元より短気者にて、

「盗賊連れが我々に対して文を送るのみか、道理めかして忠義呼ばわり。降参せよなどと聞
くもむやくし、汚らわし。遣いの者の首打って討つ手の威勢を見すべし」と云うを佐々木は押し止め、
「侮り難きは彼の奴等。遣いを殺せば怒りを増して、いよいよ難儀に及ぶべし。ただ鞭打って恥
かしめ、追いやるべし」と下部に云い付け、心無く返事を待ち居る幾入、お睦を矢庭に縛め、二十
杖打ち懲らし、門より外へ追い払う。二人は痛みを忍びつつ、帰ってかくと告げれば、大箱は怒
りに耐えず、二人を駕籠にて砦へ歸し、鞭傷の療治をさせて、さて軍勢を一つに固め、やがて討
ち出んとするを紺太郎が「しばし」と▼押し止め、

「思い出し事が候。それがし未だ新玉を娶らざりしその以前、この辺りにさ迷って、武佐の宿に一歳
余りさすらい候いしが、お蘭と云える人留女に浅からず契りしが、その女は年明いて八幡の町な
る母の家に今は居て、男も持たず三味線の指南して世を送ると、ふと昨日の夕さり方に物調べに
外面にいで、武佐の者にいで会いにし、河原町と云う町名さえ聞き知って候えば、新玉の手前も
あれども忠義の為の故、とかくは申さじ。それがしは城下へ忍び行き、黄金を惜しまずお蘭に与え、
彼女らの家に逗留し、戦の起こるを合図とし、太鼓櫓に火を放ち、立て籠もりたる兵らに一泡
吹かせ候わんか」と云うを大箱聞き終わり、「それはいと良し。仕度して合図を違えず不意を打ち、
功を立てよ」と金銀を余るまで与えれば、紺太郎らは太刀、具足を荷箱に収めて担い売りの小間物
屋にいでたつて容易く城下へ忍び入り、西ヶ原のお蘭の家に行って小判を散らして見せれば、大方な
らずお蘭は喜び、昔の客の由を云えば、母もそのままかけ出て☆、二階へ上げて様々にもてなし、こ
う珍しく▼訪れ来たる由を不審して問いければ、紺太郎は思慮浅くも計略の趣をあからさまに物

語り、新玉の事はさすがに隠して、ことだにならば、母諸共に賊の砦へ誘い行き、みやう栄華☆にあかせんなどと喜ぶ程の事を云うに、お蘭は面に笑みを含み、いと懇ろにあしらい置き、密かに親にこの由告げて、情け無くもしかじかと城主へ訴えいでければ、そのまま組子を遣わして、酒に酔いたる紺太郎を出し抜きに絡め捕り、牢屋に込め置き、厳しく守らせ、お蘭親子に褒美をたまひぬ。

彼女らは訴人の褒美のみか、紺太郎の荷箱に隠せし金銀をさえ掠め盗り、思わぬ幸い招き取りとて、小踊りして喜びけり。

○大箱は玉桐に功を譲らん心なれば、呉竹をも添えてやりしが、何と無く物足らぬ心地して落ち着かれず、紺太郎をお蘭の家に遣わしたる由などを詳しく文にしたためて、大平の方へやりければ、彼処よりも細やかに返事を書いて起こせたり。その文章の大略を云えば、浮かれ女、遊女はいかばかりしつある様に見えとて、さらさら頼みになる者ならず。紺太郎は才覚足らず、正直なる男ゆえ、もしも心の底を語れば必ず女に訴えられ、身に災いの来たるべし。さあさあ城下へ今一人、心利きたる者を遣わし、有様をうかがわせ合図を過ちたまうべからず。そのしや□は斯様斯様と、指さす如く書き記し、ひくりける☆を大箱読みて、いよいよ心穏やかならず、衣手に謀り事▼を授けて、まとも☆忍ばせしむ。

衣手は綴り衣を身にまとい、貧女にいでたち、物に紛れて忍び入り、密かに人の云うを聞けば、早紺太郎は牢屋に繋がれ、とても命はあらじと云う。さてもさても呉竹の推量が寸違わぬは実に智計海なりけりと、それより飯をいくつも結び、いささかの菜を添え、物に入れて牢屋に赴き、「近頃絡め捕りたまひし、紺太郎は元武佐の者。我が為には主人筋、何の咎かは存せねど、私がちらりと見たりし故、笑止とも気の毒とも云わんかた無く、この様に落ちぶれながら昔の恩を百が一つも報じたく、心ばかりの結び飯、あげたうで参りました。一目会わせてたまわれれば、よしや子細の罪なりとも諦めて帰りましょう。御慈悲にどうぞ」と泣き嘆けば、番の者は声を荒げて、「紺太郎は女盗人大箱の手に加わり、この度も彼処の賊らがこの城を襲いに来るその内通をせんとして忍び入り、身表され、なおざりならぬ大罪人。会わせる事はまかりならぬ」と叱り懲らされ、衣手はいよいよ萎れて両手を合わせ、

「これこの通り拝みます。どう申しても会われぬならば、せめてはこの重の内を紺太郎にお渡しなされくださる事はできませぬか。申し申し」とすがり付く、着物汚く取り乱し、垢に汚れていながらも、なお年若き衣手の匂いやかなる愛嬌に番の者も心動き、□欲しき心地して、

「そんなら飯は届けてやろう。月の晦日は罪人どもが酒を買って我々を馳走するのがここの定め。その時に来るならどうかして会わせてやろう」と弁当を受け取れば、涙を払い、

「ありがとうござります。晦日は明後日、程も無し。是非、その時はわざわざ参りお酌でも、いたしましょう」と憂いの中に笑み含み、愛嬌くれて帰り行く、番の者らはうかれつつ、由を語って彼の飯を紺太郎に与えれば、さても怪しと思いつつ、二つに割って食う結びの中に小さく丸めたる紙あれば、袂に▼入れ置き人目を忍んで開き見るに、

「晦日のその刻限には総軍一つに攻め入れれば、それまでは病と偽り、番の者に油断させよ。飯を送るは衣手にて大箱の指図なり」と衣手自ら書きたるなり。紺太郎は力を得て、病起こりし由に見せ、晦日を待ち居たりけり。

○この佐々木氏の家に年若き食客あり。さいつとしぎんしせし☆、秩父の重忠の孫にあたり。母方の縁によって、この家に養われ、男なれども女しく、読み書きは達者なれど力弱く、武芸に疎し。秩父絹次郎と名乗り、心優しく風流なり。古河はさる頃より院の女武者所のよりひと☆にて上京して大かた御所の内を出ず、絹次は歌をもよく詠めば、都に居し時いと密かに院の御所へ召されし事あり。その時古河は絹次を見初め、矢も鉄砲も恐れねど、攻め来る恋は防ぎかね、便りを求めて縁を結びぬ。

しかるにこの度、思いがけ無く、この城中へ来たりければ、男も嬉しく夜更けては寢屋に忍び、しばしば卑欲の枕を交わすに、かばかりの遊婦なれど心とろけてうちいでん、日限も延び行きしが敵より忍びを入れしと聞き、俄かに心を取り直し、怠りを深く悔やみ、今はようよう為し難し、清水がはなへ押し寄せて敵を微塵に討ち砕かんと軍兵数多引き連れて、曉方より城を出て大箱の陣へぞ攻め来たる。

大箱たちまち陣を敷き、両軍互に向かう程に、夜はほのぼのと明けにけり。大箱は古河が進み出たる姿を見るに、名を聞きしにもいやまして、何がしの姫君と云うとも恥ぬ人骨柄、花を欺く▼顔ばせに自ずから勇氣満ち満ち、にと笑って立つたる様は岩間に咲きたる牡丹の如し。大箱は心に親わしく、いかで味方に付けんと思ひ、まず韓藍を向わせれば、「かしこまりぬ」と韓藍は薙刀を携へ出て古河に立ち向かえば、古河は少しも騒がず、二つの槍にて突き立てれば、韓藍は程無く戦い疲れ、負け色に見えければ、除夜代わって馬駆け出して、かた鎌槍をひっしごき、まっしぐらに突き掛けつつ五十余合も挑む程に勝負は更に見えねども、除夜に過ちさせじと多くの軍兵狩り出して、古河を取り巻かせていたく攻めるに、古河も力疲れて辛うじて一方を切り開き、城中へ引き退きぬ。

○大箱は今宵の四ツ半頃、また大軍を引き連れ来たり。城を囲ませていたく攻めれば、古河もたまられず、再び兵もよおして、城の門を押し開かせ、命を捨てて切って出れば、大箱の左右より桜戸、花的が駆け出て、しばしは刃を交えしが、古河がげはちいと☆、激しく城兵の鋭き太刀先、防ぎかねしが崩れたち。

(傾城水滸伝) 女水滸伝 十五編ノ四 笠亭仙果編次 歌川国貞画

散々に逃げ行けば、勝つに乗って古河は一里ばかりも追い行く程に、まちや村☆の藪陰より、黄昏、夕映が現れ出て、地上に生えたる鍵繩を古河の馬の足に絡めて、遂に引き倒し、胡三郎、損二郎夫婦の者どもが駆け出て、やが上に折り重なり、古河を固く縛め、枝垂れ柳の大木の陰にたむろしたる大箱の本陣へ引立て来たれば、例の如く古河の縛めを解き捨てて、大箱は懇ろに説き示すに、古河も心を改め、三世姫にお味方申せり。

○これより先に捕らわれたる紺太郎は牢屋守の今日は弥生の晦日なり。銭ある者は酒を買い、我々をもてなすをこの所の例となせり。酒をかうや買わずやと云うこそ天の与えなれと隠し持ったる細

金を牢屋守に出し与え、酒肴多く調べ、番の者らを集めれば、卑しき者の癖として食べ物にはなつきやすく、先を争い貪る程に、ようように酔いしれ行く。この時に衣手は少し良き着物に替え、薄化粧して身なりをこしらえ、また酒肴を携えて牢屋に到れば、番人は目を細くして浮かれ立ち、手を引いて奥へ通し、心を許し酌を取らせ、衣手にうち戯れ、遂には辺りへ伏し転び、皆々眠って醜態なし、すはこの時と弁当に隠し置きたる火薬取り出し、ここ彼処に火を掛ければ、たちまち牢屋は燃え上がり、紺太郎は何の苦も無く牢屋を出て、衣手と等しくここを逃げ去りつつ。太鼓櫓を目掛けて行くに、この時は古河が敵を追いていで去りし、その後へ筒鳥、薄衣、幸目、狩倉が斬って入り、城の内の兵と戦いの盛りなれば、折こそ良けれど支える者を斬り散らし、櫓に上り、所々に火を放ち、驚かせば防ぎかね、城の主人も城をうち捨て一足出して浜手を指して田中の方へ落ちられけり。

○紺太郎は隙を見て、西河原の町に駆け行き、驚き逃げるお蘭の脇腹をいも刺しに刺し貫き、早腰抜かして物さえ云われぬ母親の首をうち落とし、日頃の恨みを晴らしけり。

○古河はこの手筈を聞いて、

「もし我が深く言い交わせし絹次郎が焼け死ねば、悔やみてもかえらじ」と、あからさまに大箱にこの事を語りいずれば、大箱も驚いて、

「さらば偏私も捨て置かれず」と息をも付かずのうち連れだち、急ぎに急ぎ駆け行って、衣手らを尋ねる程に衣手はその余の者と諸共に列を正し、佐々木の一類眷属どもを生け捕って引たて来たれば、大箱はその手柄を誉め、城内に入り、蔵を開かせ、蓄え収めし金銀財宝、民を呼び出し大方施し、生け捕りし者の内の降参せざる者は殺し、女どもは皆許し、絹次郎には古河が味方になりし由を告げ、伴いてらんしよ☆へ帰り、これより諸軍を篤くねぎらい、勝ち鬨三度打ち上げて、喜び勇むその所へ、伊吹大平へ向かうたる。玉桐の陣中より白粉が来たって告げて云う様、

「大平の城の主人も佐々木氏の一類なれど、▼程近き衣通村の滅亡を目前に見て、加勢をも出さざりしは弄大夫の乱暴を予て憎みし故なりとぞ。かくてこの度、都の討っ手の陣所になりしは時の面目いで、大箱らを攻め悩まして我が勇威を示さんものと、雅藪艶帟とて投げ槍の上手なると手負い獅子野嵐とて太刀を飛ばして敵を斬る術を良くする女武者、予ねてより抱え置きしを討っ手の大将芳野に付けて戦いを挑ましむ。芳野と申すは院の北面、桜木左近の一人娘、幼くして親に離れ、年はまだ十七八、花にもまかふ姿の艶色は吉野と呼ぶも憎からず、武芸とても世の常の勇士の及ぶ所ならねど、別して礫の名人にて、これが表に立つ者は傷を受けざる者は無し。さればこの三人の女のために我が軍勢も早再び敗北し、数多の士卒を損ず。かのみか隠し文は礫に当たって野嵐の刃を受け、小充も深手に苦しめり。玉桐、呉竹二人の刀自は憂い嘆いて、この由をまず告知らせ申せとて、私を遣わされ候」と物語れば、大箱は驚き憂い、玉桐に勝ちを譲って功あらせんと思ひし故に呉竹、著の二人さえ付けて遣りしに、はかばかしい戦も為さず、両度まで敗北せりとはいと本意無し。既にこれより大平へ押し寄すべしとて諸将を従え、夜を日に継いで彼処へ到り、玉桐らに対面し、それより両陣一つになり、大平の城外にて芳野の陣と相向かい、言葉戦いこと終わり、除夜は真っ先に進んで芳野と戦う程に除夜の槍先を防ぎかねたる様をして芳野は駒をひっ返せば、除夜しきりに追い掛ける。間を見すまし振り返り、腰に付けたる袋より礫を取り出しうち出

す芳野。除夜は早く身をかわけども眉間にかっしと打ち当たり、たまらず馬よりどうと落つ、艶席、野嵐が駆け出て除夜を斬らんとすれば、筒鳥、薄衣がこれを支え、からがら手負いを助ける此方に燕は齒噛みを為し、芳野を目掛けて突っかかれば、またも小石を打ち付けるに、幸いにして兜を打たれ、恐れて馬をひっ返す。次に韓藍は鼻打ちひしがれ、沢蟹もこめかみをしたたかに打ち壊され、面高も顎門(あご)を挫かれ、への字口して退けば、芳野は此方を見回して、うち笑って敵を待つ。その顔ばせは優しけれども寄せ手の者はひどく腹立ち、憎まお者は一人も無し。

大箱も身を躍らし、
「私自ら馬を進め、彼奴を生け捕りくれん」と出るを芍薬は押し止め、
「あら軽々し。鶏を裂くには牛の刀は用いず。私こそが彼奴めを生け捕って、ご覧に入れん」と二つの鞭をうち振って進み出れば、芳野の礫が早くも宙を飛び来たり。あわや眉間に当たらんとするを鞭もて打ち払う暇無く、またも打ち出す小石が左の肘にはたと当たれば、さすがに猛き芍薬も肝を冷やして引き退く。気早の味鴨こらえかね、息をも継がせず駆け出て、矢庭に芳野の馬の後足をしたたかに斬りつくれば、馬は驚き立ち上がる。馬の尾に味鴨は顔を打たれて眼眩み、たじろぐ所を礫を飛ばし、芳野は味鴨うち倒し、士卒に云い付け生け捕らせつ、青柳は味鴨を助けんとて駆け寄るをまたも打ち出す芳野の礫に兜の眉庇打ち曲げられて胸躍らして引返す。見かねて関屋は大薙刀を振りひらめかして追い掛ける。芳野は騒がずまた打つ礫に薙刀の歯をひどく欠かし、恐れてこれも退きぬ。

二本杉の古河は芳野と一つに都を出て、今しも降参したりしかば、同じくはこの芳野も我が日頃の手並みにて、生け捕って味方に付けんと陣前に駆け出れば、芳野はうち見て罵る様、
「敵に下りし二本杉、実に古河の濁り水。汚れし心に恥をも知らず、我に刃向かう人非人。耳我の峰に降る雪の、間無く時無く打ちいだす、礫の手練をまだ見ずや。」「何を小癩な古河が杉の梢の初瀬風、落花微塵(粉々に)に攻め崩し、自慢の鼻をも砕いて見せん」と二人は互いに駒を交えて十合余りも戦う程、芳野が打ち出す礫の石を身を避けて打ち払い、「ちっとそうでもござるまい」と打ち払って突き入れば、芳野は馬を返しながら、またも打ち出す二つの石をまた槍先に打ち払われ、芳野は無念の齒噛みを為せど、古河には敵し難く、陣門指して退くを古河は後ろより槍おっとり延べ、▼突かんとす。芳野は早くこれを避け、また踏み止まって戦うところへ索城は例の鉞振り上げて駆けいづれば、芳野の方にも艶席、野嵐が等しく出て相戦う。此方は桜戸、花的と筒鳥、薄衣が続いて突き出て芳野の前後を囲まんとす。此は叶わじと馬を早め、城の内へ逃げ行つたれど、艶席は桜戸と花的の手に生け捕られ、野嵐も辛くして逃げ行く所を音鳥が放つ矢に馬を射させ、筒鳥らに絡められぬ。

頼みきったる二人の武者、芳野は敵のものとなし、心更に楽しまず、ただ味鴨を生け捕りしを心ゆかしの一つにして、その日は戦を収めけり。

○大箱は数多の勇婦が芳野の礫に敵し難く、傷を受けしを憂い嘆き、皆山陣へ送り返し、安刀自に療治を任せ、代わりとして妙達尼、竹世、早蕨、黄葉、枸橘の五人を呼び寄せて陣へ加わえ、呉竹と語らって謀り事を云い含め、その手配りをぞしたりける。

○芳野も城主と評議をなし、一人の物見を遣わして、大箱が陣取りしたる草野川の辺りへ忍ばせ、

敵の様子をうかがわせるに、彼の忍びの者が立ち帰り、
「江鎮泊より運ぶと覚しく、姉川の方よりして数多の物を船に積み、遡らして漕ぎ来たるは兵糧
に紛れ無し。幕様の物をもて隠せど隅々現れて、米袋に相違あらず、夜に入らば陣中へ運ばん為か、
▼数多の車を河岸に集めて雑兵どもが取り巻き守って居り候。陣門は固く閉じ、討っ手いずべき様
も無し。手負いの多きに勇氣挫き、手を出しかぬるものならん」と告げれば芳野は頷いて、
「その兵糧を奪い取り、今一度肝潰させん」と、日の暮れるを待って士卒を率いて大箱の陣の後ろ
へ鳴りを静めて忍び行くに、果たして車に数多の兵糧を積み上げて、きしちせ来たりぬ。夕月のか
すかなる影に透かせば、鉄棒を杖に突きたる悪僧が車の横手にひつ添いたるは名に聞こえたる妙達
なるべし。「一礫に打ち悩まし、眠りを覚まさせくれんず」と車の前にどっと押し寄せ、妙達めが
け打ちいだす、石は蝗の飛ぶより早く、士卒を下知する妙達の頭に打ち当て、血は激つせ、おっ
とりまかれて危うき妙達、後に控えし竹世はたまらず両の手に刀を振り、多勢の中へ斬って入り、
妙達助けて車をうち捨て本陣指して逃げ行けば、芳野は数多の兵糧を手も濡らさず奪い取り、この
勢いに川中よりおいおい近づく兵糧船を脅かさんと川岸近く馬乗り出してうかがう時に船の中に
隠れたる著の仙術たちまちに星さえ見えぬ闇となり降りいづる雨の篠突く(豪雨)のつく如し☆、
芳野は怪しみ且つ驚き、過ちあっては一大事と引き退かんとする所へ四方に聞こえる関の声、耳
の根貫く攻め鼓、一群の人馬群がり来たり、
「我は虎尾桜戸なり。ここに待つ事いと久し。頭を渡せ」と罵りつつ短兵急に攻め立てれば、
芳野は驚き逃げんとすれども、文目も分かんぬ真の闇、西も東もわきまえ難く、思わず川へ追い入れ
られて慌て騒ぐを川中より琴樋、横鯛、下貝らが躍りいで、遂に芳野を生け捕りつつ本陣へ帰りけ
れば、大箱は玉桐諸共、勝つに乗じて城下へ攻め寄せ、木戸打ち破り乱れ入り、味鴨の在処を探し、
牢屋より救い出し、揉みに揉んで攻めたてれば、城の主人も応えかね、妻子、眷属を身に從えて山
深く逃げ入りければ、強いても追わず城に入り、蔵の財を取り出して民百姓を賑やかし、その後
大箱は例の如く、自ら芳野の縛め解き捨て諭して味方に付けんとする時、妙達尼は頭の鉢を手拭い
にて幾重も縛り、鉄棒ひっ下げ駆け出て、「よもやと油断の我が頭、よく打ち壊した女つちよめ」
と云うより早く討ちかかるを大箱は盾になり、
「腹の立つのは道理なれども降参されし芳野殿が謝って御座るのを▼討たんとするは返って卑怯、
御身ばかりか除夜始め歴々の大将が傷を受けしは畢竟不覚、それ恨めるは道ならず、遺恨を残さず
末々まで仲睦ましくせぬ者は腹の狭い似非勇婦。尼御前には似合わぬ」と云われて妙達たちまち悟
り、顔赤らめて鉄棒投げ捨て、「後先見ずの短気者、失礼御免」と詫びければ、芳野は頭を畳に擦
り付け、
「戦の習い是非も無し。心にかけてたまわるな。新参りなり。年端足らずお引きまわしを幾重にも
お願い申す」としとやかに云われていよいよ恥入る妙達。大箱は大きに喜び、仲直りの盃させ、
諸々の大将にことごとく引き合わせ喜びの酒宴を催しけり。

芳野は数多の人々に傷を付けしをひたすら詫びれば、大箱は慰めて、
「山陣には安刀自と云う者あって、医術に詳しく、彼女の薬を用いれば、いかなる病も即座に治す。
彼の打ち傷も三日を経ず跡も付かず平癒すべし。深くな憂いたまいそ」とて、このついでに安刀自の
身の上をも語り聞かせ、偽筆する者、印彫る者、鍛冶、番匠、織り縫いする者が兼ね備わって、山陣

におよそ欠けたる者無しとて、砦とりでの様さまを詳しく示せば、

「さて万事に自由自在、但し未だ馬の病むらさきあやのこぼたんを治す医師が▼候わずは、この城中に紫綾小牡丹と云う女あり。元西陣もとにしじんの機屋はたやの娘で馬医者うまいしやなにがしの養女となり、幼き時より親に学び、その技にいと詳しく。私の幼友達わらわ おさななり。苦しからずば伴わん」と云うに大箱こいよいよ喜び、此は究竟こくきやうの事なりとて、その意に任せ呼び寄せさせて共々とりで きじん砦へ帰陣きじんに及びぬ。

傷を受けたる者共は大箱が云いし如く、既に大方癒えたれど、芳野を見て心の内に怒れども芳野が身を低くしてひたすら詫わびるに心解こころとけ、手練しゅれんが人に優れしを些いささか誇る顔も無く、若々しくあどけなげなれば、憎く思いし者どもも返って可愛く思いけり。また先に虜とりことなりし艶馬やさとらも野嵐のあらしも「芳野が降参せし上は誰が一議とうしんに及ぶべき」とやがて二人も投身しつ。

○三世姫さんせひめは大箱始め、各々おのおの おまえを御前に召され、

「先に約束せしに違わず、早く城を落せし者が総大将そうだいしやうになるべきなり。論までも無く大箱こそ第一の座そうらに付き候え」と仰せに誰か違背いはいすべき。大箱も否むに由無く、なお幾度も人々にその任に耐えぬ由を云い云い、遂に受け引きければ、諸将しよしやうも始めて心を安んじ日を改めて広間に集い、喜びの酒宴を催し、今日までに集まりし人の数を数えるに、父母妻たぐいその類を除き、大将分と云う程の者もも、百八人に及びければ、呉竹まゆねゆたは喜びの眉根豊かに微笑んで、

「仁義にぎぎ員いん☆を兼ね備え、姫君の御味方申す兵つわものの数、百人に余れるは昔よりかつて例無く、見聞きせず、これ天津神、国津神、鎌倉殿の御血筋を埋れさせたまひしを哀れみたまうにあらざりせば、いかでかかる事に及ばん。いよいよ砦とりでを堅くして、忠義ちゆうぎの心を金鉄きんてつにひし、あくまで人馬じんばを訓練し、近々義兵ぎへいの旗揚げなし、北条一家はつじやういっけを討ち滅ぼし、亀菊かめぎくらを▼追い放ち、幾程も無く姫君を御世おんよに出し参らせん」と勇みに勇めば、大箱も共々に喜びつつ、今にも戦いくさをいだせば、必ず戦いくさに勝つべきなれどもいよいよ諸国の大君を敵に取っては半年一年、勝負の着かぬ事もあらん。小蝶せうてつの刀自とうじの一周忌いっしゅうきは冬にして、なお早けれど同じくはこの卯月の忌日きにちにとりこし大法会だいほうえしゆきやう修行すべく思う」とて、そのあらましを詳しく語り、次の日より近き辺りの大寺へ人を遣わし、尊とうとき法師ほうしを数多招き、忌日より先立てて、七日の間の仏事ぶつじくやう供養、初めの日はつげせんぼうは法華かほうねんぶつ懺法、二日目は加法念仏かほうねんぶつ、三日の日は法華八講ほうげはっかう、五日は施餓鬼せがき、六日は舍利会しゃりえ、結願けつがんには胎曼茶羅たいまんぢらぐ供をおほけ無くも取り行いぬ。その式作法は事しげくかな物語りの草紙そうしには方が一つも印し得難し。ただ極楽ごくらくの体相ていそうを余さず漏らさず、この所に写したるに異ならず、尊とうとしなどとは世の常なり、これまた前代未聞と云うべし。

○さて第六日目の朝早くあかにしに朱西しゆせいが船ふねにて送りし尼君にきみあり。紀の国那智なちのお山おやま、室長寺むろちやうじの弟子と云えり。都修みやこしゆきやう行の道すがらにこの仏事ぶつじを聞き伝え、招まねきは無けれど推参すいさんせり。席むしろの端はしにて弔問ちやうもんし、後あとにて回向えこうしたしと云う。年は四十に足らざるべし、いと美しく艶めけれども自然に備わる仏の妙相みやうそう、名作の仏像しやうに生の入りたる如くに覚え、見る者かしら頭かみを下げぬは無し。凡人ぼんにんならじと大箱、呉竹めどぎ、箸しゆなども出迎えて、一間ひとまに入れて饗きやう応おうすれども飯いひを少し食しせしのみ、茶ちやをうち飲み見返らず、頭陀袋ずだぶくろより大きな数珠じゆずを一連取り出し、

「此は昔より国々の浮うかれ女め、傀儡くぐつし子しらびやうし、白拍子しらびやうし、名高なきもさあらぬも簪かんざしの飾りに用いて、首かみなどに▼巻たまきたる玉珊瑚たまさんご、瑪瑙めなふ、針水はりすいしやう晶何くれと集あめ合わせこしらえたる物おぼと思しく、ことごとく遊女ゆうじよの名所なところ、金泥きんていにて玉毎たまごとに印あしたるは違ちがわざり。年としを経へし物と見えて金泥きんてい落ちて所の知れぬも、また

名の読めぬも少なからず、実にこれらの者が所持せし物か真偽り知る由無けれど、不思議に感得なしたるこの数珠の数は定め百八つに承れば、この山に立て籠もられる女武者、これも一百八人と聞くに付けても、それは賢女勇婦たちにて、この玉の主は卑しく浅ましき淫行女婦の汚れたる形見なれども仏縁を結べる数珠は邪正一如※、今日の導師のお手に触れば、よしやその罪浅からず、うまぬ遊女の魂も極楽往生疑いあらじ。さらばいよいよ亡き人の為にもならんと存ずれば、苦しからずばその由を導師へ披露に□□ばれて」と渡せば大箱、呉竹らは且つ驚き且つ喜び、まずその物の珍らかなるに見取れるとて、しばし言葉も無く導師に取次ぎかくかくと告げれば、導師も怪しみ尊み、その日の作法にこれを用い、仏前に供え置かれつ。

※邪正一如(じゃしょういちにょ)：仏語。邪と正はもとを正せば一つの心から出ていて、結局同一である。善悪不二。

かくて次の日曼荼羅供も日傾く頃に首尾良く終わりぬ。この時に彼の尼は何処へ行きしか跡形も無し。昨日より入れ置きし一間には並々ならぬ香の香りがしきりに満ちたり。此は仏菩薩の形を表し、奇瑞を示したまうならんと、いよいよ尊く、さるにても彼の数珠はことにまた稀代の物ぞ」と仏前より下ろして見るに、実に玉毎に遊女の名がごとく如くに印したるは昨日も既に粗々見えしが、今日はまたその名の下に彫れるともなく、書けりともなく、自然と文字の数増さって、大箱始め玉桐、呉竹、百八人の名もあだ名も、一人ずつ玉毎に現れたるこそ不思議なれ。

大箱と玉桐と印したるを一二と定め、順々に読みもて行くに、おのれおのれが座席の次第、定めたるに大方違わず、「此はそもいいかに」といよいよ驚き、植梨に筆取らせ、一字も違えず写し取らせ、一つ一つ披露なしたりけり。

その写し、さの如し▼

江口の妙は春雨の大箱
須恵の珠名は今栖軽玉桐
白拍子微妙は智慧海の呉竹
百上山姥は指神子著
江口の観音は太刀野閑屋
檜垣の姫は虎尾の桜戸
こしの狭古子は迅雷電秦名
入間川の牡丹は雙鞭芍薬
三島江口の友君は女弓取花的
神崎のかねは折瀧の節柴
舞姫いわは上不見鷲岩居
神崎の小観音は篠芒の朱良井
舞い女姫法師は花殻の妙達尼
江口の本姫は女行者竹世
神崎の宮木は二本杉古河
舞姫いしは礫石芳野

あおはか おおあらし おおやぎ
青墓のなびきは青嵐の青柳
やりうめがえのとしのよ
遊びかがめは槍梅枝除夜
むこうみず なわしろ
遊女とくは向不看的索城
あかがしら あじかも
ともこりは赤頭の味鴨
つむじかぜりきじゅ
赤坂の力寿は旋風力寿
ふせ おんないだてんのなつめ
布勢の海のはしは女韋駄天夏女
てらどまり はつぎみ ふせんりゅうのころもて
寺泊の初君は浮潜龍衣手
かわじり てんちさんのすえひろ
河尻のくわんだうは天地金末広
しらびょうし ひたどび いなずま
白拍子ぎくわうは直鳶の稲妻
かんざき かわこもひめ みやこどりのこととい
神崎の川菰姫は都鳥琴樋
くぐつし おおとしまのふたあみ
傀儡子ぎみは大歳麻二網
いけだ かめつる まるきぶねのよこたい
池田の亀鶴は丸木舟横鯛
えぐち きちがいみず いつつい
江口の中の君は氣違水の五井
きせがわ かめつる かいつむりのしたかい
木瀬川の亀鶴は零丁鳥下貝
くぐつ ぎみ きしほ じんのななわた
傀儡まこ君は鬼子母神七曲
なながし わくらばのなつやぎ
橋本の君某は病葉夏楊
くぐつ いのちしらずいわひ ぼ
宇都宮の傀儡ふち王は命不知岩飛葉
やままたやまのさちめ
江口の熊谷は山又山幸目
とまりやまのかりくら
同此和は十萬里山狩倉
こい くぼ なみつづみのおどり
恋ヶ窪のおとはは波鼓音鳥
ぬ ぼたまのくるひめ
神崎のとねぐろは野干玉黒姫
こい くぼ さくらぎ そらみ つやまのもみじぼ
恋ヶ窪の桜木は天見津山黄葉
がもう いらつめ まこのてのさわらび
蒲生の郎女は麻姑手早蕨
なながし ぶちこまのおもだか
丹州の君某は斑駒面高
くぐつなながし そらまなこのさわかに
天の川の傀儡某は天目子沢蟹
かにしま みづはのめのさざなみ
蟹島のによいは水波能目細波
かくしぶみのそで か
まるがやつの白菊は隠文袖の香
うか め すもうとりくさのからあい
浮れ女こきは相撲取草韓藍
かにしま かがつちのおきしま
蟹島のかうろは迦具土熾島
やまともじのうえなし
舞姫ごわうは大和文字植梨
しまでら ねずみもちのそでかき
島寺のそで女貞木袖垣
はなまたのおおどり
恋ヶ窪のくもいは花間田大鳥
いかのぼりのとびこ
ごんのべんたかとしの母は烏賊幟飛子
すみぞめ くぐつなながし たますだれ つばくらめ
墨染の傀儡某は珠簾の燕
おわり くれないのやまもも
尾張のあこ丸は呉藍山桃
ぎみなながし ゆうとどろきのうちいで
五条のたち君某は夕轟打出
はまのまさごつきじこ
舞姫むりやうは浜真砂月二子
なわしろみずのつとり
あこわうは苗代水筒鳥

あこめは伊達模様薄衣
あおはか えんじゅ たんばのやすとじ
青墓の延寿は丹波安刀自
かにしま くじゃく むらさきあやのこぼたん
蟹島の孔雀は紫綾小牡丹
しらびょうし せなやりのくだかけ
白拍子明一は瀬那遺腐鶏
むる とまり あおうなばら こさまる
室の泊の君は蒼海原胡沙丸
くぐつしなにがし わらべんけいのほしな
ほしなの傀儡子某は藁弁慶干魚
くぐつしなにがし やまわけごろものはにずり
かがみの傀儡子某は山分衣埴摺
あおはか ゆうつつたそがれ
青墓のじじうは長庚星黄昏
いけだ ひどほしのゆうばえ
池田のじじうは獨星夕映
くぐつし はちちようかねのこみつ
傀儡子百三は八丁鐘小充
えぐち とびきつねの こん
江口の三位は飛狐お紺
かんざき ひじりこがたなえりたえ
神崎の刀命は聖小刀彫妙
つきよぶえずすかせ
同つきこそは月夜笛涼風
かしわざき あさを ゆうにじの ひくま
柏崎の朝尾は夕虹日熊
かるも はるがすみのたつま
同川藻は春霞龍間
みなれさおのおきつ
みづきのこしま子は水馴竿沖津
やといしんみょうぬきいと
舞姫たきは雇鍼妙抜糸
とがくし しこめ
江口の戸くは戸隠の女鬼
くぐつなにがし こしじ いまはんかく
寺泊の傀儡某は越路の今板額
やさすがおのめきぎす
大江氏しろめは優素顔雌雉
みのがめのひきお
江口のとのもは蓑亀曳尾
かんざき こちこ まいおうぎのそのきよ
神崎の小稚児は舞扇園喜代
くちぶえのてりうそ
遊女しんによは口笛照鷹
かんざき みやびやぶのやさどら
神崎のこことひは雅藪艶帟
えぐち ておいししののあらし
江口の小うまは手負猪野嵐
かわじり いちぶじんかわほり
河尻の小さくわんだうは壺分金河堀
かせぎ つじぎみ やまもりの こわ
鹿が辻の辻君某は山盛お剛
くぐつしまんざい あまつかりまゆみ
傀儡子万歳は天津雁真弓
くぐつしせんざい おんなにおうそまき
傀儡子千歳は女仁王杣木
かんざき とらのつめのちがき
神崎のこそは虎乃爪千垣
はながさね ふたあいのしおん
川口の華重は二藍紫苑
てごし ひとよせのともま
手越のせうしやうは人寄友代
こまいぬ おけんつう いぬ
神崎の狛犬は億乾通お犬
かいづ やまとぼくやのゆのはな
貝津のかねは日本莫弥袖花
まいひめやしや ほんにゃめんわたはし
舞姫夜叉は般若面渡橋
かんざき ももばやしふるひな
神崎のみや子は百林古籬
しらびょうし かわやしらのひながた
白拍子若千ざいは川社籬形
あかし なにがし ありそかみ あかにし
明石の遊女某は暴磯神の朱西

傀儡子とみよ十三四は浅恵あさえ比須びす富崎とみさき
 志摩しまのぜんざいは肘ひじ枕まくら福女さいわいめ
 若わかのまへは面杖つらづえ喜よろこ枇こび
 立花たてはなをえいぜし遊はりめびは鍼目きぬ衣の枸から橘たち
 足柄あしがらの小こ秦はだは八重やえ機はた彩の雲いろくも
 関戸せきどの遊女なにがし某ぬは没べら面目ぼうお焦しょう
 萱津かやつの宿なのいうくん某なにがしは桐火きりり桶ひ石竹おけのせきちく
 白拍子しらびょう玉王したまおうは合砥あわせ礪せ新玉あらたま
 昆陽こやの宿しゆくの遊女なにがし某はなは花なばたけ畑の青芝あおしば
 宿まりのきんぜん尼してんは摩利支天こん紺たろう太郎う
 大磯おおいそのあいじゆの尼やまみずは山水てんぐ天狗そん損じろう二郎う
 蟹島かにしまのみや木ひやくは百せん錢ばあ婆むつお陸むつ
 飾磨しかまの傀儡子くぐつ某なにがしは家鎮から染そめ幾の汐いくしお
 江口えぐちのしろめひるねずみは昼鼠しろの白粉しろこ
 赤坂あかさかの黒鬚くろひげの君てなは手長がえび蛭のは早潮やしお
 蟹島かにしまの立まきもちづきは望月たけずみの竹澄たけずみ

▼この座ざに連なる人の限かぎり、益々き奇異いの思しいを成なすのみ。何と云う事ことを知らず、今日けちがん結願どうしの導師どうしと云うは伏見指月ふしみしげつ森もりの北きたなる般舟院はんしゅういんの先さきの僧正そうじょうで水月和尚すいげつおしょうと名乗なって、今は真まことの世捨よすて人ひと。弟子でしの僧そうと童わらわ一人ひとり連れて、心こころの赴おもむく方かたへ杖つえを飛ばうして遊あそび歩あき、有縁うえんの衆生しゅうじょうを化度げどせられしが、このとりてり皆みなにせうだい☆せられ、かの如ごとく法会ほうえをば務つとめ終つとわって、その後のちにこの数珠じゆずの事ことに及び、人々ひとびとに語かたられける様よう、

「我われかつて聞きし事ことあり。鳥羽とばの院いんの頃ころかとよ。紀きの国くにの那智なちの室長寺むろおさでらに開山かいさんの祖師そし室海むろかい比丘尼びくには夫おとも定めず虚むなしくなりし傾城けいせいども百八ひゃくはち人の魂たましいを込こめ、塚つかに築たき、傾城塚けいせいづかと呼よびなしたるを立木たつきと云いえる代理女だいいりじょうらう臆おんつかが御使おんつかいをこうむって、彼の寺かへ行き、その塚つかを止めれど強しいて暴あばかせければ、かの込こめ置おきたりし魂たましいならん、百八ひゃくはちの光あかりものが四方しやうほうに飛び散ちり失しせし由よし、今いまこの数珠じゆずの奇特きとくを見みれば彼の傾城かの魂けいせいが各々たましい方かたと生まれいで、前世ぜんせいに人ひとを色いろにて惑まどわし作りたる罪咎つみとがを現世げんせいにて滅めつせんと、かくの如ごとく女の豪傑ごうけつ、世よの稀者まれものと生まれ出でて、国くにに忠義ちゆうぎを尽くさん心こころを尽くし身みを尽くし、今いまかく元もとの数かずに違たがわず、一百八ひゃくはち人が集あまりし、その因縁いんねんを示しさん為ためにその室海仙人むろかいせんににんか、実じつにかく次第しだいをおしゆけば、各々おのおのの座席ざせきのかにおつ☆、私わたくし無なくて最もも良よし。かくまでも仙物せんぶつのあつ篤あつき守まもりのある上うへは姫君ひめぎみが世よにいでたまひ、各々おのおのの心こころの願ねがひ、重じゆう々じゆうの時無ときなからずや。いよいよ忠臣ちゆうしんおこたおこたらず、仁義にぎぎの道みちにな背そむかれそ」と説とき諭さとされて、大箱すえずえ、呉竹かんな、末々くれくれの者ものまでも感涙かんなみ袖そでに注つぎけり。尚なほもまた怪あやしきはその次つぎの日ひに至いたって、彼かの数珠じゆずさえ搔かく暮くれ見みえず、いよいよ室海仙人むろかいせんの□やうの不思議ふしぎを仮かりに見みせたまいしならんと、皆みな思おもえり。▼

これより^{みやこ}京、鎌倉より^{たいぐん}大軍しばしば押し寄せしが、世に珍しき^{けいりやく}計略のづを外さず、勝ちに勝ち、次第に勢い加わるままに、^{あましようぐん}尼将軍も^{よしとき}義時ももてあぐみて^{きや}氣病みをなし、遂に命を^{いたづら}徒に成し、^{かめぎく}亀菊は院の御所の御寵愛も^{おどろ}衰えて元の卑しき^{まいこ}舞子と落ちぶれ、^{かどた}門田の局の枢機にて、^{さんせひめ}三世姫を親王家の嫁の君とかしづいて、^{くわい}鎌倉の将軍の位に据えて、^{こう}百八人は功成り名を遂げ、^と身は退き、^{しりぞ}楽しみを極めしは^{まこと}真に目出度ことどもなり。

この由詳しく記さんには容易からぬ業なれば、まずこの辺を大尾とす。目出度し、目出度し、目出度し、目出度し、目出度し。

^{じっそうむる}「実相無漏の大海に、^{たいかい}^{ごじんろくよく}五塵六欲の風は吹かずと云えども、^{ずいせんしんによ}随縁真如の波立たぬ時無し」

(能「江口」より)

^{あんぎゃ}行脚の僧が^{みやこ}京から津の国(摂津国)※の天王寺への途中で遊里で有名な江口の里に来て遊女江口の^{きみ}君の旧跡を^{とむら}吊い、^{さいぎょうほうし}西行法師が昔ここで宿を断られた際に詠んだ歌「世の中を厭うまでこそ難からめ仮の宿りを惜しむ君かな」を口ずさんでいると、そこへ女が現れて、「それは一夜の宿を惜しんだのではなくて、この世も仮の宿であるから、それに^{しゅうちやく}執着しないようにと忠告したまでのこと」と弁解していたが、^{たそがれ}黄昏時になって「実は私はその江口の君の幽霊です」と言って消え失せた。その後、^{きとく}旅僧が奇特な思いで^{とむら}吊っていると、^{えぐち}江口の君が他の遊女達と一緒に舟に乗って現れ、遊女の境遇を謡ったり、舞を見せたりしていたが、やがて江口の君の姿は^{えぐち}普賢菩薩と変わり、舟は白象となって白雲に乗って西の空へ去って行った。

※概ね現在の大阪府淀川以北および大阪市域と尼崎市から神戸市・三田市に至る兵庫県南東部。

目出度し、目出度し。

<翻刻、校訂、翻訳：滝本慶三 禁転載 底本／早稲田大学図書館所蔵資料>